（別紙様式４－１）　　（県立高等学校・中学校用）

熊本県立第二高等学校　令和６年度（２０２４年度）学校評価表

１ 学校教育目標
本校の三綱領「自主積極・廉恥自尊・礼節協調」の具現化に努め、知・徳・体の調和のとれた全人教育を推進する。また、これまでの教育方針に基づき、教職員が一体となって保護者や地域との連携のもと、県民の期待に応え、活力がみなぎる存在感のある学校づくりをめざす。

２ 本年度の重点目標
（１）学びの”二高スタイル”の深化 （２）二高塾の教材開発（オリジナルテキスト等）と運営の研究 （３）定期考査改革とその後のフォロー・評価 （４）ＧＲ、ＳＳ、ＡＳの内容研究（ＳＴＥＡＭ－Ｄ）と論理コミュニケーションの導入 （５）ビッグスカイ高校との交流とGlobal Studies Programの活用 （６）朝のＳＨＲのあり方の研究〔朝は生徒把握、放課後は連絡中心〕 （７）思考させる生活指導〔制服着こなし、時間等「見逃さず、厳罰せず」〕 （８）ＳＮＳの指導のあり方の研究及びいじめ防止対策のあり方検討

３ 自己評価総括表

評価項目 大項目	評価項目 小項目	評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
学校経営	特色ある学校づくり	自ら学ぶ態度の育成	「進路指導年間計画」に沿って、各学年で段階的に主体的に学ぶ姿勢と自学自習の習慣を定着させ、学力伸張の基礎を固める。	各学年における進路目標を明確化し、計画に基づいて進路学習や個別面談を実施することで継続的かつ個別に生徒の意識に働きかける。「授業第一主義」を推進するため、教材研究をはじめ、大学入試問題研究・分析を行い、教師がより高い教科指導力を身につけることで、生徒が自ら学ぶ姿勢を図る。	B	進路指導計画に基づいた模試、二高塾、面談、キャリア教育等を予定通り実施することができた。難関大入試問題研究及び分析により教科指導力向上に努め、定期考査での作問、難関大受験者指導に活かされている。生徒の主体的に学ぶ姿勢については、十分な育成ができておらず課題の１つであるが、早い段階から大学進学を見据えて自走する生徒が見られるようになったことも事実である。
		読書習慣の定着	生徒の朝読書週間定着率９０％以上を目指し、読書の幅の広がりを図りながら自己変容の質的の向上を目指す。	年間を通して「朝読書」を継続する。読書週間の取り組みを活性化させ、積極的に読書に取り組む生徒の育成を図る。	B	朝読書への取組状況は昨年度比1.5%増の90.3%と目標値を概ね達成している。これは担任副担任が必ずつくという共通認識が職員間に浸透したことの成果であろう。

		ＳＳＨの推進	ＳＳＨ先導改革型３年目として、新事業であるＳＴＥＡＭ－Ｄ、科学哲学のカリキュラム開発と、熊本サイエンスコンソーシアムとの連携を深め、先導的な役割を果たす。進路指導部と連携し、論理コミュニケーションを導入し、国際標準の構成、表現方法を身につける。	・ＳＴＥＡＭ－Ｄはこれまで美術科で培ってきたプログラムを理数科、普通科に発展させる。・科学哲学は理数科先行で実施し、ＳＳＨ講演会やＳＳＨ研究成果発表会など行事と連動させて、内容の充実を図る。 ・熊本サイエンスコンソーシアムを基盤として高大接続を推進、課題研究など生徒の探究活動を軸に連携を充実させ、成果を外部に発信する機会をつくる。 ・論述指導では、３年間を見通したカリキュラムを探究活動委員会で十分に協議し、成長の段階に応じた教材を選定し、探究活動を組み合わせ全職員で指導にあたる。	Ａ	・美術Ｉの授業で物理と連動した授業を開発、前年度のＳＴＥＡＭ―Ｄの活動が探究活動に反映されている（美術科２年生の探究では３４％）。今後は美術以外の教科でも開発を進める。 ・科学哲学、科学倫理の効果を検討する根拠として、生徒の自己評価を分析、さらにマクマネー検定等客観的な指標を活用し、生徒の変容に優位差を得ることができた。 ・熊本サイエンスコンソーシアムを通した大学との共同研究は８件、加盟校へのアテンドは２２件。校外発表での準備も進んでいる。 ・論理コミュニケーションの導入で職員の指導力向上と生徒の思考力向上の成果があった。経費削減も考慮して、本校生の実態に合った教材にアップデートする。今後は校内研修や実際の進路指導（志望理由書、小論文、面接指導）とのリンクを強化する。
		学校生活・学校行事の充実度	二高生らしく、生徒一人一人が主体的かつ積極的な行動ができるよう促し、一体感や感動を体験させる。	これまでの学校行事を見直し、より一層の充実を図る。運動会や文化祭などの学校行事を単に楽しさだけの追求に終わらせず、心の成長に繋げることで、一体感や感動を体感させる。	Ａ	運動会、文化祭ともに生徒が主体となり充実したものとなった。運動会では各団毎の大声合戦や最後の風船飛ばしで心が一つになった。また文化祭でも、全校生徒が皆で肩を組み合唱する感動の場面も生まれ、一体感を体感することができた。
	開かれた学校づくり	情報の公開・発信	公式サイト及びPTA広報誌について内容の更なる充実を図り、生徒・保護者・卒業生・地域、そして県民の方々へ積極的な情報発信を行う。	各学年、各分掌、部活動などサイトの更新頻度を高め情報を発信していく。PTA広報委員会との連絡を密にし、保護者の目線による本校の良さを的確に伝える内容を目指す。	Ａ	第二高校ホームページから部活動や学校行事、各科、各分掌の取組など昨年を上回る情報発信がなされた。PTA広報誌は４回発行することができ、育竜会広報委員の生徒への取材などで充実した内容となった。
		保護者・地域等との連携	・学年保護者会等を企画・実施する。 ・学校行事を近隣小中学校や地域に公開していく。二高会報の内容について更なる充実(視覚化等)を図り地域等へ積極的な情報発信を行う。	・ホームページやclassi等による情報伝達を迅速・着実に行い保護者への周知徹底を図る。 ・地域の皆さんの理解を得るため、ホームページに行事予定や広報誌を掲載するとともに、二高生の活躍の場面を積極的に発信する。	Ａ	各学年・各部署の職員からホームページやclassiを利用して、丁寧に情報の発信がなされ、保護者への周知徹底ができた。特に、ホームページでの情報発信をすることで、本校活動をアピールすることができた。
	安全管理の取組	健康教育の推進	保健・相談部を中心に、全校生徒へ感染症等予防の呼びかけ	職員が連携して授業のみならず、校内巡回を行い、生徒の様子を観	Ａ	健康診断の日程設定と監督者不足等に課題が残った。救急救命法の時期の検討が必要で

			を行うと同時に、個別のケアも行う。全職員で校内の安全点検を行い危険箇所の改善をする。	察する。また、支援・配慮を必要とする生徒については、特に職員間で共通理解を図る。校内安全点検では、記録表を活用し、年度内３回の点検実施と改善を行う。		あろう。感染症防止の観点から講演会についてはオンラインで実施する等の対応もしている。今後も引き続き、生徒・職員の感染症予防対策は徹底に向けて工夫努力をしていきたい。
		施設設備の保守・点検	安全点検結果や普段の見回りをもとに、危険箇所の改修を行い安全安心な環境作りに努める。	事務での施設点検や、保健・相談部と連携して危険箇所の情報を正確に把握し、優先順位を決めて学校予算で対応できるものは、速やかに改修する。大規模改修については、県に予算要求して改善を図る。	A	・保健・相談部と連携して、掃除道具等の整備を進めた。 ・県へ要望している普通教室棟トイレ改修は4列のうち1列は工事が完了した。残り３列についても引き続き予算要望していく。 ・特別教室棟トイレについて洋式化工事が次年度予定。 ・体育館天井崩落や停電等の突発的事案についても予算措置し修理等の対応を行った。 ・引き続き老朽化した普通・特別教室棟等の校舎改築に向けて、県へ要望していく。
	業務改善・働き方改革	業務改善及び働き方改革の推進	・１・２年生の早朝学習撤廃を授業充実につなげる。 ・分掌部の改編並びに班長制による実効をあげる。 ・休校等の臨時措置に対応できる体制を堅固にする。 ・学校行事の見直しを推進する。 ・日課表の検討を進め、業務配分を適正な形で示す。 ・定例の衛生委員会を職員の健康確認につなげる。	・朝の時間をゆとりにつなげる。 ・業務の見直しと連動し効率化を図る。 ・ＩＣＴ機器を活用、配信授業等行うための職員のスキル向上と研究・整備。 ・学校行事をはじめとする各取組のあり方を見直す。 ・日課表を見直したことで勤務時間内での業務処理を促進する。 ・全職員が時間外勤務の問題点を理解し、適切な業務時間を励行する。	B	・朝の時間について、ＩＣＴの活用促進と日課表の改善は継続して行う。 ・働き方改革について、時差出勤導入や衛生委員会記録の回覧等を活用することで、個人の意識改革は進んでいる。一方で、業務の偏りは残っている状況であり、各校務分掌においてチーム感をもって業務改善を進めていく。 ・学校行事等について、開催後のアンケート等を活用し、次年度を見据えた振り返りを行う体制作りができた。 ・学校保護者間連絡システムを活用し、休校等の臨時措置を円滑に行うことができた。
学力向上	学習習慣	宅習（予習・復習）の習慣化	動画や課題の配信、授業資料の提示など１人１台端末の活用により、個別最適化された学習内容を提示することで、宅習の質の向上を図る。	突発的な休校等における家庭学習でも、動画と課題の配信を行うこととしている。各学年で国数英を中心に継続実施する。	B	・日々の情報発信や課題の提出、アンケートの提出等で、日常的に活用できている。・１１月の停電の際はテスト返却や動画による学習支援で日々のＩＣＴ活用の経験が役立った。・一人一台端末を活用する分、問題集や資料集を含むペーパーレス化、経費削減を目指す。
	授業力の向上	授業評価の活用	主体的かつ協働的活動を取り入れた授業展開やＩＣＴの活用等、授業形態が変化している現状を踏まえ、実態に即した評	授業評価が一層実態に即したものとなり、教師の授業改善に資するものとなるよう、授業評価項目を見直すとともに、授業改善につながるよう教科に情報を提供する。	A	・授業評価アンケートを実施し、その結果を職員会議で共有。アドバイスも含めた生徒へのフィードバックを行った。・生徒、職員の負担軽減のため授業評価アンケートの後

			価を行う。そのことで、授業改善及び生徒への学習支援につなげる。			期は学校評価アンケートと代替し、生徒・保護者の意見を集約し、分析を行った。・各教科から出される課題の量、タイミングについては学校全体で課題を分析し、方向性を定める必要がある。
		研究授業の実施	三観点評価の研究と授業改善を軸に、研究授業と相互研鑽授業の推進を進め、授業改善と評価研究に活かす。	教務部、進路指導部と連携した職員研修を実施し、新教育課程について共通理解を図り、相互研鑽授業と連動させる。振り返りのアンケートを実施し、成果を数値化して共有し、改善に活かす。	B	・シラバスの作成と共有を通して職員・生徒の観点別学習状況評価の理解を深める。・評価の内容は各教科の特性が表れるため、各教科での生徒に対する丁寧な説明が必要。・教科、学年、校務分掌での目線あわせをする為の研修を行っているが、時間不足。会議の構成を工夫し、職員同士の協働的な研修が必要。
キャリア教育（進路指導）	進路目標の実現	進路実現に繋がるキャリア教育の展開	・進路講演会や進路ガイダンス及びインターンシップを実施して生徒の進路意識の醸成を図る。 ・オープンキャンパス等を通して大学や入試情報を収集できる環境を整備し、情報の発信及び共有を行う。	・ガイダンスについては、１年は同窓会と連携した職業別の講座、２年は学問系統別に大学の講師を招聘して実施する。 ・オープンキャンパス（WEB版を含む）への参加や大学主催の体験学習への参加を促す。また、情報発信を適宜行う。 ・オープンキャンパス等の活動の記録をデジタルデータで管理するように指導する。	A	今年も本校同窓会と連携して職業別進路ガイダンス、インターンシップを実施した。インターンシップは１００人を超える１年生が参加し、職業別進路ガイダンス同様に参加した生徒からは非常に好評であった。この企画は本校同窓生と在校生の交流の場としても位置づけされており、第二高校の伝統の継承にも一翼を担っている。インターンシップと職業別進路ガイダンスは夏休み前後に実施するために業務が集中し、担当の職員の負担が大きく、次年度は少しでも簡素化できるように検討したい。 夏休みを利用して１，２年生のほとんどがオープンキャンパスに参加し、その記録をデジタルデータで管理することで、学年で情報を共有することができた。
		個に応じた進路指導の推進	・生徒との対話を大事にしながら、多様な生徒の多様な進路希望の達成を最優先する。 ・学年に応じて自己の進路を考える機会を充実させ、生徒の進路意識及び学習意欲の向上を目指す。	・個人面談や巡回面談など定期的な面談を実施し、生徒や保護者の思いを大切にした進路指導を全職員で取り組む。 ・生徒個々人に合わせて進路希望別の課外を実施し、より効果的で個に応じた学習指導の実践につなげる。 ・模擬試験については、事前・事後指導、また業者と連携した結果分析を定期的に行い、生徒の学力の現状を理解する。	B	定期的に個人面談や巡回面談を実施し、生徒や保護者の理解に努めることができた。特に巡回面談は担任以外の職員が生徒を知る上でいい機会となっている。 昨年度より始めた「二高塾」は進路希望別や習熟度のクラス編成を行い、生徒個々の学力やニーズに合った学習指導を実践することができた。 模試の結果分析会を学年毎に実施し、生徒の学力の到達度を共有し、教科指導に活かす機会を設けた。模試では近年偏差値５０以下（３年次）が続いており、生徒の学力状況

						を把握した上での、授業改善や教材研究が必要であると考える。
	進路情報の発信	進路に関する適切な情報の提供	・学期毎の「進路だより」の発行、年１回の「進路のてびき」の発行により、本校の指導方針の理解や進路情報の提供を行う。 ・進路資料室や掲示板の積極的な活用を促すことで、生徒の進路意識の啓発を図る。	「進路だより」は、各学年の状況に合わせた内容のものを発行する。また、学年会や進路検討会等で本校の進路状況の説明を行い、進路指導や面談等の機会に活用できる最新の進路情報を発信する。	A	年３回の「進路だより」の発行では、先生方の思いや進路情報等を発信している。現実問題として「進路だより」を活用する時間が不足しており、費用対効果を検証する必要がある。学期毎の進路検討会、進路判定会は職員研修を兼ね、本校生の学力の現状を共有した。また各大学の学部学科の特徴やボーダーラインなど進路情報を知る機会となっている。
生徒指導	交通指導の取組	交通指導の強化と交通マナーの向上	昨年度、交通事故件数が大幅に増加している現状を踏まえ、今年度は更に交通安全に関する啓発を積極的に行い、マナー及びモラルの向上を図り事故や交通違反の減少に繋げる。	単車通学生講習会や朝の登校指導及び生徒主体の交通安全啓発活動を行う。保健において、生徒たちに交通安全について考えさせる授業を行う。約８割を占める自転車通学生の交通安全についての意識を高める取り組みを実施する。	B	昨年度、交通事故が多く交通安全対策が一番の課題となった。日常的な声かけや指導により事故は大幅に減少につなげることができた。一方、交通に関する苦情の電話なども寄せられるなど、交通ルール・マナーに関する課題が残る。来年度からは、自転車ヘルメット着用が条件となる。命を守るためという本来の目的を伝えて着用を勧めていく。
	服装指導の取組	生徒の服装における自己管理能力の向上	服装規定や制服が変わる過程において、生徒の自律を促す日常的な指導や声かけを継続する。	服装規定の確認を行い、必要であれば毎年校則の見直しを考えていく。全生徒が安心して学校生活を送れるよう、生徒たちには校則の意義を考えさせ、自らルールを守る態度を身に付けさせる。	B	３年生が旧制服、１・２年生が新制服という異なる制服が混在する最後の年となった。服装に関する大きな課題は出ていないが、ネクタイ・リボンを忘れたり、ボタンを留めない等の課題は残る。日常的に指導を継続し、正しい制服の着こなしにつなげたい。
人権教育の推進	人権・道徳教育の取組	教職員・生徒の人権意識の向上	・生徒は、各学年２・３回のＬＨＲでの活動と一日の大部分を過ごす学校における生活の中で、人権意識の向上を図る。 ・教職員は、ＬＨＲの事前研修や人権問題についての校内研修及び校外研修等を通して人権意識の向上を図る。	・ＬＨＲ活動内容について主任が作成した案を人権教育委員会で検討し、管理職に了解を得た上で職員の事前研修を行い、共通理解を図ったうえで実施する。 ・教職員はオンライン等の校内研修を踏まえ、全職員が研修成果報告を提出する。校外研修会にも積極的に参加し、研修内容を他の教職員と共有する。また教育活動を通して人権意識を涵養できるよう	B	・人権ＬＨＲでは本県とも関わりの深い、水俣病、ハンセン病を毎年交互に取り扱うこととしている。今年度はハンセン病を取り上げ、歴史的経緯、患者やその家族が置かれた実態について理解を深めた。ＬＨＲ実施計画作成にあたり、事前に菊池恵楓園で実施された研修会に参加した。 ・職員研修では、部落問題を扱い、今年度外部研修であった資料を全職員で読み、フォームズで回答する形で実施した。また、人権教育委員会を開催し、ＬＨＲの実施や外部研修の内容、参加、職員研修に寄せられた感想について協

				、文書などで啓発活動を行い、生徒にフィードバックできるように研鑽する。		議した。初任者研修、中堅教諭等資質向上研修でも時間をかけて様々な人権課題について協議した。
	特別支援教育活動の推進	不登校傾向の生徒をはじめとした生徒への支援活動	早期対応及び適切な対応ができるように各学年会において生徒情報の集約を行う。個に応じた支援計画や指導計画を行う。	・週１回、教育相談部会を開催し、各学年の生徒状況を確認、また保健室の利用状況やＳＣへのつなぎなどを関係学年や担任と連携しながら早期対応や早期個別支援体制を作る。 ・ケース会議、特別支援教育対策委員会を状況に応じて開催する。	B	・各学年の生徒情報をもとに、早期対応や予防のために迅速にケース会議やSCへ繋ぐケースが増えた。 ・ケース会議には、管理職や保護者にも参加して頂き、連携して生徒の支援にあたることができた。
	命を大切にする心を育む指導	自他の生命を尊重する心の涵養	命を大切にする心を育むために、「健全な自尊感情を育む」、「規範意識を育む」、「人間関係を築く力を育む」を目標とする。	授業、ホームルーム活動、特別活動、総合的な学習の時間等すべての教育活動において、三つの目標を明確に位置づけ、道徳的実践活動を効果的に推進していく。	B	授業のみならず休み時間も含めて全ての関わりの中で心の育成を伝えている。この日常的で継続的な取組が生徒の規範意識の向上につながり、自他共に命を大切にする心の育成につながっている。
いじめの防止等	いじめの実態把握	いじめ早期発見の取組み及び相談体制の確立	いじめの早期発見・実態把握に努めるとともに、生徒・保護者が相談できる環境作りを行う。	生徒が相談しやすくなるような声かけや環境作り及びカウンセリング指導を重視し、未然防止と早期発見に努める。併せて心のアンケートによる実態把握生徒会の取組等を行う。	B	二者面談や教員間の情報共有により、生徒が相談しやすい環境作りができている。カウンセラーの活用も呼びかけており、未然防止と早期発見につなげている。今後は生徒会による取組を活性化していきたい。
	指導体制の整備	いじめに対する措置	いじめが発覚した場合は、組織をあげて速やかに対応し、問題解決にあたる。	いじめが発覚した場合は、担任を中心に連携と共有を図り、いじめ問題対策委員会で速やかに対応する。その際、個人情報の扱いに留意しながら保護者とも連携し、被害生徒の安全と安心を最優先にした姿勢で取り組む。	B	事案が出た際は、迅速な聞き取りを行い、組織での対応を行っている。また、心のアンケートなどで事例が出た際の情報の共有を関係部署に迅速に行うことなども課題として今後に活かしていく。
地域連携（ｺﾐｭﾆﾃｨ･ｽｸｰﾙなど）	コミュニティ・スクールの活性化	学校運営協議会の開催	総合型学校運営協議会として、地域の行政機関や保護者、地域住民等との連携を深め、学校の魅力化を推進する。	学校運営協議会を年２回開催し、教育課程の編成や学校経営計画、防災体制の充実など、学校運営全般について改善のための協議を行う。	A	学校運営協議会を、２回（６月と２月）開催して地域との連携を深めることができた。委員の方々からの、本校に対しての貴重な御助言等を職員間で共有して今後の学校運営に取り入れたい。
	地域との連携	校区防災連絡会との連携	東区役所や校区自治協議会との連携を深め東町校区地域の防災体制を推進する。	東町地域の防災訓練に参加し、避難所運営マニュアルの確認を行うとともに、防災体制の改善を行う。	A	市役所（東区役所）の防災担当職員と連携して、校内に備蓄している防災備品の点検を実施した。１１月に、熊本市一斉防災訓練を本校にて区役所、東町校区自治協議会と合同で行った。

理数科・美術科の充実	理数科の充実	科学的に探究する能力と創造力の育成	・SSH第Ｖ期（２年目）の中心的存在として、イノベーション人材に必要な能力を育成する。 ・課題研究を活用した進路実現に向けて、理数科を対象とした進路検討会を実施する。 ・高度な専門性と独創性・創造性を身につけた人材育成。	・哲学や倫理の思考を取り入れた本校独自のSTEAM教育を開発・実践する。 ・課題研究の内容、発表会への参加について、志望先の入試形態を意識させながら、実践的な準備を促す。 ・大学と連携した課題研究や大学の研究室や企業への訪問を実施する。	B	・あらかじめ計画した授業、課題研究、対外的な発表等については予定通りに実施し、理数科の取組として成果を上げることができた。 ・取組の成果を日常の学習習慣の確立や学力向上につなげる取り組みに課題があり、進路希望実現の観点から、職員間の課題意識をさらに共有して取り組ませる必要がある。
	美術科の充実	美術を愛好する精神とキャリアにつながる実技力の向上	・各専門科目を横断し多様な知識と実技力を育成する。 ・美術系進路への意欲を高め早期の志望決定と計画的な対策を行う。 ・美術を通した社会性と自己有用感の涵養を図る。	・全単元でＩＣＴを活用するとともに、３カ年シラバスを充実させ、ティーム・ティーチングによる個別指導を深化させる。 ・年次に応じた進路情報や対策を示し、面談等による志望決定と実践的な準備を促す。 ・外部との連携による発表の機会等を設けるとともに個々の課題等を指導者間で共有する。	B	・個別、協働、一斉学習の各場面でＩＣＴ機器を活用し、シラバスを元に、生徒の実態に併せて効果的な単元を実施した。 ・三者面談後に生徒情報交換会を行い、各学年の志望状況や手立てを共有した他、外部講師による進路ガイダンスや美術系大学進路対策研究会等で進路意識の高揚を図った。 ・公募展等でのべ１３４名が入賞入選を果たしたほか、ＳＳＨによる校内外での探究活動を推進した。